紅葉を愛で 歴史をたのしむ バス栃木の旅

2018•11•16　記　小川 雅愛

実施日時　2018年 11 月 15 日(木)　7:45～18：00
参加者　　24 名

旅行にはこれ以上ない好天に恵まれた晩秋の一日、勇躍、栃木目指してバスの旅に出かけました。所沢インターから入り、まだ、真新しい圏央道の鶴ヶ島から白岡・久喜ジャンクションを経由して東北道を通り栃木インターで降りるバスルートは快適で予定より 10 分前に栃木に到着しました。帰りも順調で、予定した時間に所沢に帰着でき、秋の一日を十分たのしむことができました。

現在の栃木市は栃木県第三位の 15.9 万の人口を擁する都市です。内陸立地型近代工業や食品工業が集積しているほか、農業も盛んで、かつ観光の町として発展しています。
戦国時代には皆川氏の築城が契機となり、城下町や集落が形成されてきました。さらに、江戸時代に入り、日光東照宮が築かれる際には、江戸から日光に至る可航河川の上限にあたる巴波川（うずまがわ）の栃木河岸が御用荷物や建築資材等の重要な搬入ルートとなりました。この時代から江戸に舟で運ばれる物産品は都賀地方の特産品の麻・かんぴょう・石灰、那須地方の煙草、さらには会津地方からの米・漆器などでした。広域な後背地からの多くの代表的な特産品の集荷市場として栃木の河岸は栄え、木材問屋、御用米の問屋、麻問屋、金肥を扱う問屋など 6 つのもの大きな廻漕問屋が川沿いに並ぶ豪商の街となっていました。

もう一つ町にとって大きな契機となったのが江戸時代、日光東照宮の 4 月大祭に合わせて、正保 4 年（1647）から毎年行われるようになった日光奉幣使（日光例幣使）の通る街道の宿場町になったことでした。奉幣使は例幣をささげるために遣わされた勅使で、慶応 3 年（1867）幕府滅亡＝王政復古までの約 220 年間途切れることなく続けられました。例幣使は家柄の高い公家の蔵人ほかの家人 50 人で構成、幕府から相応の道中費用が支払われましたが、道中宿での実入りも多く、当時、裕福ではなかった諸公家にとっては歓迎すべきことであったようです。
京都からの往路は中山道を通り倉賀野宿から日光に抜ける近道であった例幣使街道９４㎞、13 宿を通り、楡木宿から日光道中に入り今市宿を経て日光に到着。帰路は日光道中を通行して江戸周りで京都へ帰るのが慣例でした。4 月 1 日に京都を発ち 14 泊 15 日の強行軍で 4 月 16 日の東照宮祭礼の 1 日前の午前中に幣帛や奉納品を納めて儀式を終えていました。
例幣使街道は商人や一般の旅人の往来も盛んで、途中の天明宿（佐野）に次いで大きい栃木

宿には本陣に相当するものもあって賑わっていた様子が平岩弓枝さんの小説「例幣使街道の殺人」に描かれています。例幣使街道は五街道に次ぐ、重要な街道と位置付けられており、道中奉行が管理し、事件には関八州取締出役の江戸の役人が処理にあたることもありました。

栃木の歴史にとって巴波（うずま）川の舟運による豪商と蔵、例幣使街道の宿場町の 2 つの性格を持ち、この地域全体の水陸の要衝であり、玄関口として大きな役割を担っていました。こうして栄える街には豪商との交流のある狂言師や文化人・絵師など多数来遊し、交流を深めて賑わっていたと言われています。

もう一つ幕末期、栃木の町にとっては不幸な事件は天狗党一派による愿蔵火事に見舞われ、町の大半を焼失したことです。所沢では武州世直し一揆が大きな事件ですがほぼ同時期の災禍であったことです。藤田小四郎率いる筑波天狗党が元治元年（1864）3 月筑波山で挙兵、総勢 170 名に増えた天狗党は 4 月 10 日に日光東照宮で参拝し、天下に挙兵を示すために東照宮を目指すが日光奉行に、この時期は例幣使到着を理由に押しとどめられました。そのため、筑波山と同様な信仰の山　太平山に 4 月 14 日に陣を構築し、栃木や周辺の豪商や豪農等からの資金集めに奔走しました。日光奉行の許可は下りず、滞在は長引き 5 月 31 日下山し、筑波山に帰るまでの 47 日間　太平山に滞在しました。この間、尊王攘夷のあり方を巡って尊王でも幕府あっての尊王の小四郎と倒幕を主張する資金集めに長け、発言力を増す田中愿蔵一派とが路線対立を深め、ここで決別。居残った愿蔵は資金集めを続けるが、その途中誤って商家の小町娘を殺す事件が発生し、町の人からの反撃を恐れ、逃走の途中町に火をかけたと言われます。天狗党が危険視され、以後追われることになった大きな事件でした。

以上の歴史を踏まえて旅のレポートを続けます。

栃木市に入り、昼食会場の魚宇駐車場に 10：00 にバスが到着し、街の遊覧船に予約で乗るまでの 30 分間では、どこか見学するには中途半端な時間となりました。

巴波川に沿って続く塚田歴史伝説館の塀沿いの道を歩かず、対岸をゆっくり歩き、木材問屋で財をなした塚田家の川に沿って建つ、6 つの蔵が連続する長い建物、荷揚げ場などを観察しました。橋と橋の途中には吉屋信子の文学記念碑があり、しばらく見学しているうちに乗船時間が迫り、対岸の船着き場に急ぎました。

★蔵の街の遊覧船に乗る。10：30～11：00

一艘の定員は 20 名、我々は 24 名なので、12 名に分かれ 2 艘にして前後して漕ぎだしました。

川には鯉や鴨が観光客の投げるエサを求めて集まってきます。川の水深は約 50cm と浅いようです。川では多彩な観光行事が行われているとのことで、江戸の昔を偲ぶ試みがなされています。船頭さんは頑健な男性ですが、

当地と江戸を短期間で川船往来する江戸時代の船頭の体力にはとてもかなわないといった言葉は印象的でした。江戸時代も歌ったであろうという栃木河岸船頭唄の美声を聞きつつ、お囃子を全員で唱和しながら短時間の遊覧を楽しみました。乗船した場所で記念撮影後、割烹魚宇に戻り、美味しい海鮮丼の定食をいただきました。

★市内から太平山へ

太平山は標高 341m、頂上近くの太平山神社までは麓の鳥居から 1000 段の石段があります。途中には合宿所があり、修験道の盛んな、古くからの信仰の山と言われています。

★謙信平で関東平野を一望する。12：15～

太平山にはつづら折りの狭い坂道をバスは慎重に昇りきると平らな場所に出ます。眺望は一気に開け、関東平野が地平線の彼方までワイドに広がる謙信平に到着しました。遠方には富士山が見えることもあると聞きますが、本日は霞がかかり確認できません。謙信平は関東管領の庇護者をもって任じる上杉謙信が北条氏康と戦いを繰り返した後の、和議の古事に由来するところです。謙信平からは陸の松島と呼ばれる景色が見られます。その由来は渡良瀬川近くに点在する林が陸で田畑が海と見做し、日本三景の松島に良く似ていることからということが納得できます。

★天狗党の碑・山本有三の文学碑を見る。

ここには観光案内やマップには掲載されない天狗党の碑があります。明治になって天狗党の遺族の方や関係者によって建立されたと聞きましたが、会の皆さん半端ない興味津々、解読に集中されて、盛り上がりました。

近くの小高い場所に栃木生まれの小説家山本有三氏の文学碑があり、路傍の石の一節、たった一回きりの人生・・・の文言がいたく胸に響きます。長く故郷の栃木を離れていた山本有三氏は高齢になってこの文学碑の除幕式に参列し、地元の暖かい歓迎のうけ、感激したと伝えられています。

★紅葉をみる。

太平山では明日から紅葉まつりが開催されることになっていますし、先般の調査の際出会った麓のシニアで、謙信平まで毎日のようにウォーキング登攀している方が紅葉は素晴らしいですよと、話していましたので期待しました。ビューポイントにうまく行かなかった為なのか紅葉は少しか見られなくてやや期待はずれでした。

★太平山神社を訪ねる。

次に急な石段が続く坂を登りつめた先の太平山神社に到着、山頂の神社とは思えない立派な佇まいの美しい神社です。ここからは筑波山が随分と近い位置に見え、天狗党がここで資金集めのためにキャンプを張る理由のほかにここ太平山に逗留した理由が何となくわかる気がしました。帰路の坂を下る途中に、栃木市が眼下一杯に広がって見えます。市街の夜景はさらに美しいようです。

★再び、市内へ帰り、13：40 から 15：４０まで市街散策。

2 時間に限定し最初は団体行動、後半は各人複数タッグの市街散策をしました。

★とちぎ郷土参考館見学（無料施設）

内部は郷土の歴史がわかるように展示してあり、最初に選んだ施設として正解でした。市の学芸員のような詳しい方が常駐していて、懇切、丁寧に説明いただきました。壁に江戸時代の町割り地図があり、巴波川岸に面して殆どの蔵屋敷は税対策のためか短冊状に間口は三間程度、奥行きの長い並びで建られていました。蔵は廻漕問屋や商売の業態により一番奥、南側、北側、川沿いと様々に建てられていました。当館の建物も例外ではなく、元は川に向かってなんと９０ｍの長さでした。

川船は巴波川の水深が浅いので、平底構造の舟でした。それでも積載能力は約 3 トン、米俵 50 俵に相当します。ここから渡良瀬川まで行き、そこからは大型船に荷物を積み替えて江戸に向かったということです。重量の嵩む荷物は河川交通の方が陸上輸送よりメリットがあり、江戸時代に発達した理由が実感できます。ただでさえ、水深の維持に腐心している廻漕問屋と下流域の村落の住民の間では農繁期の水利をめぐって争いが絶えませんでした。

もう一つ栃木の歴史で重要なのが、廃藩置県後の明治 6 年（1873）から明治 17 年（1884）の 11 年間栃木町に県庁、県議会がおかれたことです。戊辰戦争の被害の大きかった宇都宮町、当時は栃木町が経済的に恵まれていたことなどが理由のようです。この間 3 名の県令が交代、3 人目の三島県令の時代、この地方に自由民権運動が盛んになり、それを嫌って、復興した宇都宮町に県庁は移転しました。

★旧栃木県庁跡見学と付近

現在は県庁の建物はなく、堀が遺構として残されています。県庁の跡を示す石碑とレトロな旧市庁舎がわずかに雰囲気を伝えています。途中、麻問屋であった横山郷土館がありますが、県庁堀から続く塀沿い水中にはそれを示すように麻が栽培されていました。

★市役所４階　期間限定、観覧無料の喜多川歌麿肉筆画大作、雪・月・花を見る。
　旅の時期がよく、壁に３部作が開催展示されていた歌麿の高精密複製画を見ることができました。実物２作品はアメリカの美術館に渡り、１作品のみ国内にあるようですが、複製でも十分に美術作品を堪能できました。喜多川歌麿はこの街にたびたび来たようです。
　市役所庁舎はデパートと同じ棟にあり、こうした建物は全国的にも大変珍しいことですが、市内には銀行と問屋が相対した建物で営業したとされる横山郷土館があり、その流れかなと想像します。

★ここからは自由散策ですが、意外に時が過ぎるのが早く、帰りの集合を 10 分遅らせました。
　個人行動で迷うと困るので、複数人がかたまって行動を要請しました。

現在は大きな通りですが、例幣使街道の名残を残す通りの歌麿館（無料）に立ち寄りました。ここも説明員の丁寧な説明がありました。市内どこに入っても係員が丁寧に解説してくれます。
　ここでは内部より建物の建て方に注目、今は拡張された道路に面してななめ 30 度程度一方が引っ込んだ構造です。これは街道を通る人から何の商売をやっているか甲板が歩きながら見やすいように考えたということです。左右の建物も同様で、ホテルを含め、数軒は昔のルール通りです。岡田記念館近くが例幣使街道の雰囲気のあるところですが，残念ながら帰りの集合時間までには往復ができなく断念しました。
　自由散策では山本有三記念館、あだち好古館などに人気がありました。中でも山本有三記念館は説明の方の口調が抜群によかったようで、大いに評価されていました。ここだけでツアーは大満足という雰囲気でした。欲を言えばもう少し時間が欲しかったというのが実感です。

　以上大変に長いレポートとなりましたが、同時代の所沢の歴史は果たしてどうだったのか？
　また、外から所沢を見つめ直すことで、異同を感じることができます。現在はスマートフォンやパソコンで簡単に歴史や観光情報が得られる時代ですが、多様な資料で調査することを忘れないようにしたいと思います。
　現場を直接見て、考え、その地域の人の話を聞く機会をもつことのできるこうした旅行は貴重でした。希望があれば毎年バス旅を続けられればと改めて思いました。